

第118回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年6月10日 (月) 14時～17時

兼題「枇杷」

- 川井素山 ○潮風の傾に枇杷の熟れにけり
蜘蛛の囀の破れて光る雨上り
表札の増えし隣家や柿若葉
摩崖仏欠けし慈顔や花菖蒲
- 保井寶正 ○寺の桶家名うすれし夏書^{げがき}かな
枇杷の種白磁の皿にころり三つ
降り立てば薫風抜ける名駅舎
夏休み付箋だらけの花図鑑
- 佐久間喬 ○^{みどりご}嬰兒の泣き声透る梅雨晴間
オペを待つ病室の窓五月闇
夏来たり樹々の色変へ退院す
枇杷の実の三つ四つ転げ垣の外
- 丸山酔宵子 ○ストレスをつまみに呑むか走り梅雨
土用の日串打つ指の逞しき
水弾き枇杷盛る皿を探しけり
熟れ枇杷や明日は腸内内視鏡
- 菊地崇之 ○一房の枇杷の^{おもて}面に母映る
紫陽花や映し出でたる楊貴妃像
花菖蒲^{かすり} 緋姿の伊藤蘭
十薬や栽培せずも庭を占め
- 吉田啓悟 ○房総の誘ふ枇杷狩り即決す
鰻屋のふるびきつたる店構へ
身の中は噴火口なり揚羽蝶
今日の色明日明後日七変化
- 青木英林 ○黒南風や潮騒の音ここまでも
ぼっかりと浮ぶ色香や合歓の花
栗の花あちこちに見ゆ常磐道
献上の枇杷は房州サイズ艶

山本草風 ○茹でたての卵剥く如枇杷食べる
鍛錬の日焼け止め塗る少女一人
飯を食い隣で妻も昼寝かな
風薫り夫婦の諍い穏やかに

渡辺鯨波 ○枇杷たわわ潜伏キリシタンの里
父の日や万年筆でマス埋める
走り梅雨ここは終活一休み
通院をさぼり万緑潜り込む

後藤克彦 ○雨続きいつしか伸びし余り苗
登校の子足止め見るや時計草
枇杷の実や届かぬ枝に数多し
雨上がり見栄え一段濃紫陽花

永井正孝 ○枇杷の実の青大将が護りおり
竹の子を摺り足をもて探索す
虹立ちて異郷の空が美しき
紫陽花を背負ひて墓の現わるる

佐久間たか子 ○初枇杷の雨音になほ匂ふかな
赤子来る雷雨に消さる泣き声よ
新茶飲む窓辺のくもは絵画かな
蛍火や同時点滅いさぎよき

原 唱如 ○母になる娘は母にカーネーション
流言の小さく大きく枇杷に種
石膏の天使の足裏青葉風
老人にハツドク匂ふ町溽暑

青葉ひかる ○枇杷の木を移し行く末安堵か
因果かな為す術も無し夏の夕
紫陽花に皮肉の大意知る涙
牡丹色の着物懐かし若き母

次回「萩句会」

日時 2019年7月8日(月) 14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『山開き』一句
当季雑詠 三句